

ホトギス

一月号

ホトギス
昭和二十四年一月
平成二十九年一月
一月二十日発行
（第百二十号）



俳句随想〔四百十五〕

汀子

三笠宮崇仁親王殿下のご逝去のニュースがテレビ画面で報じた。殿下と妃殿下は虚子の許で開催された十五人会という句会に参加され俳句に御造詣が深い宮様であった。

俳誌「ホトトギス」が創刊百年を迎えた平成八年、その祝賀会に御臨席頂き、ご祝辞を賜わったことも記憶に新しい。ホトトギス創刊百年記念歌舞伎『髪を結ふ一茶』新作能『実朝』に、三笠宮殿下同妃殿下のご臨席も賜わった。芦屋の公益財団法人虚子記念文学館へもご臨席賜わり、我が家で昼食をお摂り頂いた。又、横浜の近代文学館に於ける『近代俳句の夜明け展』にご来臨頂き、急遽、芦屋の虚子記念文学館の主任学芸員小林幸代氏も駆けつけ、むつかしいが楽しいご質問にお答えしながらご案内させて頂いたことも忘れることが出来ない。「ホトトギス」の歴史の中でいつも見守って頂いて来たことを有難く、これからの「ホトトギス」の歴史にしっかりと繋いで行きたいものである。

元気な高齢者が増えた中に我々も加わっている。俳句を作る人々はしっかりと頭を使い歳を重ねてきている。俳句会、吟行会に出席するためによく歩かなければならない。

こんなお便りが通信欄にあった。

「今月（九月）は落選したと諦めたのですがずっと前の方で見付け大いに安堵しました。お陰で他の人の作品を沢山読みました。思わぬ効用でした。以下略」皆様が、たった二句を精一杯投句して下さっていることを心に選者の力量をしっかりと磨かねばと思っっている。

句日記 汀子

平成二十八年 朝日新春詠

怪我もまた一頁なり日記閉づ
電飾は闇が舞台よ初明り
乗初や運転免許更新す

一月四日 ロイヤル俳壇

新年のやうやく我に戻りたる
家族皆揃ひて過ぎし三ケ日
三ケ日過ぎて生活の戻りけり
風花の舞ふ寒さとてなかりけり
新しき年の変らぬめでたさよ

一月七日 永田青嵐顕彰俳句大会

暖かき島に集ふ日近づきぬ
邂逅の心の友と語る春
早春の光集めて大会に

一月八日 工業倶楽部

初夢や若き日の吾に戻りぬし
嫁が君とて存在のあらばこそ

一月九日 荻屋ホトギス会

初空に雲を置かざるめでたさよ
書初や筆を選んでよりのこと
寒灯の旅と思へぬ陽気かな
寒灯を消して旅路の一步かな

一月十日 下萌句会

初旅や見慣れし富士の改る
辻樓の合ふ初夢のめでたさよ
初夢や我が人生の一頁
俳句会揃へば祝ふ雑煮かな

一月十二日 大阪倶楽部

餅花に触るる会場出入口
寒紅梅よりはじまりし庭曆
寒風や六甲の嶺々鎮もれる
寒紅を差して出先のありにけり
独り居の寒夜の灯明うせよ
年玉に笑顔並んでをりにけり
寒月や天心細く残る朝

一月十二日 綿業倶楽部

寝過ごせし言ひわけめきし初笑
わが書齋居ながらにして日向ぼこ
思ひ違ひより初笑なりしこと
挨拶の心行き交ふ日向ぼこ

一月十四日 清交社

寒牡丹咲き終りしと地に下ろす
寒雀声よ降りて来たる群
新年を祝ふ会場らしくなる
枯芝に転ばぬ配慮考ふる
一人づつ話す新年ありにけり
初空の富士よ着陸態勢に
稿債の山に向ひし三日かな

一月十六日 年尾先生を偲ぶ会

富士よりの風の冷たさ心地よき
富士近くなる寒くなること承知
皆バスに悴む笑顔乗り込みし

一月十七日 偲ぶ会二百目

この富士を語らば凍てたるのみぞ
一月十九日有恒俳句会
新年といふ一区切りありてこそ
初富士の変幻旅を語らばや
御慶とも消息二三行き交へり

枯芝に転ばぬ手摺もて案内
一月十九日 無名会

松過の句日の経つ早さかな
寄せ植ゑてありその一つ福寿草
東京の雪逃れ来し如くにも
初旅を終へしこと早常の如
スケジュールいつもの如く松も過ぎ
又常の一人の家居松過ぎぬ

一月二十日 夏潮句会

快晴の旅厳寒の家居かな
旬日の変化に処すも厳寒に
二十人焚火の句ひ纏ふ句座
庭焚火困めば思ひ出の中に
焼諸の出来不出来など言ふまじく
焼諸を食べ終へし顔揃ひたる

一月二十日 時雨句会

七種を祝ふも一人なりしかな
結局は乗初となる仕事かな
大雪の予報に旅路ありしこと
欠席の一人は風邪と知らさるる

一月二十八日 さくらぎ会

初富士の旅も果せしことに足り
初富士に旅程組まれてをりにけり
初富士の全き旅路はじまりし
かけ抜けしあれは銀座の嫁が君
一人旅一人暮しも去年今年

一月二十八日 アネモネ句会

昨日まで四温に心ゆだねぬし
風邪癒えよ癒えよ旬日またたく間
あるがまま三寒四温常の如
暖房や今日を飾りて鉢のもの

廣太郎句帳

廣太郎

平成十八年一月七日 蕉心会

寒卵こだはりもして目玉焼
齊打つ妻より早く起きる夫
人日の句座に集ひし縁かな
山茶花のピンク淋しと言ふあなた

一月九日 青風会トギス会

初菫星のきざはして女視界
筆始宙を彷徨ふ少吹越え
寒晴を発ちて富士越え伊吹越え

一月十日 野分盆屋扇例会

初鶏を鳴かせ旧家でありにけり
ラグビーの足に惚れたる鴉けり
初鶏の二度にペトロの憂ひけり

一月十日 青風会扇例会

初句会弥撒に始まる緑かな
初句会より動き出す左脳かな
寒鮎に剥がされてゆく湖面かな
初句会あづき桂湖の晴着かな

一月十日 朝日カルチャーセンター句会

正夢を信じ消息確かに宝船
七種の籠に貼りつくレクイエム
悴みし耳は小説より奇なり
追悼の音の悴むり重奏
七種の香るより夫起きて来し

一月十二日 祝「玄海」主宰交代

待春の心とは祝ぎ心かな
一月十四日 土筆会

寒見舞文字の歪みも気にしつ
初風や六甲嵐宥め見舞つ
運転ふこと多くなる母寒見舞
雪吊の作法に江戸の気品かな
一月十六、十七日 高嶺年尾先生を偲ぶ初句会

凍人の美と忘れて久し山中湖
六人を待つ寒朝舞ひし神楽殿
日脚伸ぶ葉流さん淹れし一服宿
故郷の如く白亜の避暑宿

一月十七、十八日 年寿会

雪女郎てふ恋人を置き去りに
富士を見て富士に見られて春を待つ
待春の湾に歴史を重ねて山眠つ
連なりて重なり合うてな避寒宿
ダイエツト挫折しさうな音宿
待春の目覚め雨音風音かな
待春の湾凸凹になら四季歌
寒灯を潤ませてある四季歌

一月十九日 北國文芸選者吟

初旅を終へ句心の新しく
一月十九日 ウェブ俳句通信 出句
百態の中の一態雪の富士
冬晴や日の本富士を要とす
冬雲の去来富士晴れ富士隠れ
小正月の節目に拝む雪の富士
選暦の節目に溢れてをり湖の隣
日表といふ富士五湖の春隣
三寒の風もこの水音も春隣
登りもす雪富士見ゆるところまで
冬雲を化粧ふ木花の開耶姫

雪富士に近づいてゆく歩幅かな

寒林を抜けて小正月常宿に
凍雲の下に消えぬ己の庭の静寂
太霧に明かされてゆく雪の富
冬夜星の裾となりし雪の富
寒酔も泥酔一人づつ寒灯なる
百人の句座一人づつ寒灯なる
雪鳥の湖青く南国の日は差
白鳥の伸びゆく先の日脚伸ぶ

枯尾花纏ることに揺れなく
凍豆に塗る替へられし華や
伊豆の白梅と右に富士を見
雪の無きことも一富士一富士
冬霞力抜くとき富士現る
雪帝の甲斐と形を變へて
お歸りと出迎へられし宿

海光を背に浴びつれぬ宿
足湯を背に浴びつれぬ宿
雪湯を這はせ民家といふ
枯薦のやうな二泊り初史
永遠のやうな二泊り初史
冬ぬく劇場小初史
待春の都心小初史
待春の都心小初史

大寒の都心へ変奏曲奏へ
待春の都心へ変奏曲奏へ
大寒の都心へ変奏曲奏へ
待春の都心へ変奏曲奏へ

大寒の都心へ変奏曲奏へ
待春の都心へ変奏曲奏へ
大寒の都心へ変奏曲奏へ
待春の都心へ変奏曲奏へ

仕事場の寒灯明る過ぎるかも
 対岸は風の溜り場春隣
 大雪で遅れることも旅して
 冬霞伊豆七島の模糊と贅
一月二十一日 登高会
 富士の香を重ねゆく斜面かな
 水士の風凍湖磨いてゆきにけり
一月二十四日 青風会東京例会
 昼食はおにぎり二つ寒日と
 探梅の白に拈がりゆく猫視
 日向ぼこ特等席を知る猫と
一月二十四日 野分会東京例会
 ラグビー部たりし佳人で俳人
 初鶏に句碑の歳月重ねゆる
一月二十六日 若水句会
 悴んで次の一言待つてをり
 齊の吹いて糸くぼの深き玉
 魂の光を放ちぬるの玉
 その奥の奥の奥なるの玉
 竜の玉無限の光蔵しつ
 双子の玉七種の好き嫌
 悴む手超絶七種巧弾いてをり
一月二十七日 目黒学園句会
 凝鮎大琵琶の景引き絞
 大寒の中に我も居りたる宝
 銀舎利の天帝少し疲れば
 宝船やはり煮凝あれば
 煮凝をのせて白米喜べり
一月二十八日 祝 大倉源次郎氏観世春大賞受賞
 伝統を未来へ繋ぎ春を待つ



雑詠 廣太郎 選

酒の香のせしといふ滝まのあたり 神戸 後藤比奈夫
 養老は父祖のふるさとこの滝も 同
 風鈴や恋ひたすらな頃のあり 福山 竹下陶子
 恋をしてゐるとは見えぬ泳ぎの娘 同
 一天の重くなりたる花火かな 同
 曲線は宇宙のならひ夏燕 渋川 木暮陶句郎
 ナイターの歓声萎みゆくファウル 同
 風鈴の釘風道の芯に打つ 同
 百合抱いて遠くの波を見てをりぬ 神戸 山田佳乃
 刀豆の大地貫くほど育つ 同
 黒々と奥羽山脈秋暑し 同
 宇治の月ここに懸れる鵜舟かな 同 和田華凜
 芳一に聞かせやりたや虫の声 同
 七盛の墓に休める秋の蝶 同
 草相撲果て村中の人気者 龍ヶ崎 今橋眞理子
 刀豆の切れ味もまた育ちゆく 同
 門火焚くふとむらさきとなることも 同

炎天の塊として歩くかな 熊本 岩岡中正
 炎天のみな波打つてゐるごとし 同
 秋の航一語一語のごとく島 同
 雨一夜過ぎて秋めく京の朝 長岡 安原 葉
 友に会ふみちのくの旅秋涼し 同
 東大は近くて遠く秋暑し 同
 バツカスの吐息かかりし葡萄かな 神戸 涌羅由美
 一村を裏返したる野分かな 同
 海に生れ海に去り行く野分かな 同
 水澄むや水にもありぬ肌触り 香川 湯川 雅
 上下して噴水の丈子等の丈 同
 径に奥その先に奥秋思の歩 同
 河骨の水に咲きぬしすぐ見慣れ 熱海 嶋田一歩
 振花の揺れゐることの素直なる 同
 濃き色となり紫陽花の重くなる 同
 一枚の水こなごなに滝となる 東京 橋本くに彦
 澄む水の音無き音や隅田川 同
 名園の景の曼陀羅秋浅し 同
 芒の穂日差の向かう側へ揺れ 岡山 伴 明子
 爽やかや今日会ふ人も川風も 同
 晴れすぎて平面となる秋の空 同
 一時の空ありうすばかげろふに 袋井 湖東紀子
 木洩日を返す鋏にぶだう剪る 同
 移ろひは違ふことなく法師蟬 同

雑詠句評（十二月号より）

公次・仁義・霜衣
くに彦・しげ人・一步
佳乃・雅・純也
さい雪・廣太郎

お召しかへして団扇手に坐らるゝ 福山 竹下陶子

「お召しかへ」、ご高齢の作者にして、この、ていねいな言葉づかいをする相手とは、作者が日頃から尊敬の念をもっている人物にちがいない。筆者は、和尚さんと断定。用があつて寺を訪ねたところ、ちょうど和尚さんは檀家から帰られたところ。ちよつと着替えてきます、と奥へ消えられ、やがて僧形から、団扇を手にした、くだけた俗形に変身されて、作者の前に坐られた、というのが句意であろう。平易な表現でありながら、ある人物像がきちりと描かれており、写生のさえがあり、学ぶべきところの多い一句といえる。（公次）

一つ一つの言葉から優雅な雰囲気醸し出されている。さりげない日常の営みが語られているが、その一語一語から、何か高貴な方の仕種を想像する。今はあまり使われなくなつてしまつた上品な「お召しかへ」なんて言葉が、庶民的ともいえる季題をよりゴージャスに伝わってくる。（廣太郎）

雲の峰背後窺ふ雲の峰 香川 湯川 雅

掲句の「窺ふ」は、ひそかにつけ入る隙を狙うという意味である。作者が雲の峰を眺めていると、別の雲の峰が、その背後を窺うがごとくに盛り上がりつつあつた。そのとき作者は、雲の峰の偉容が、雲の峰の相互のせめぎ合いによつて生まれていることを察知し、それを詠んだのである。作者の鋭い観察力の賜である。（仁義）

もくもくと雲の峰が湧き上がってくる。それだけでも結構迫力を感じるものだが、その背後にも湧き上がる雲の峰がある。こうなつてくると、何か不気味にさえ感じてしまうが、その後の夕立まで想像出来る。雲の峰の湧き上がるスピードが生き物のようにダイナミックに表現されている。（廣太郎）（以下略）

天地有情

汐干狩芦屋に浜のありし頃 東京 稲畑廣太郎
 朧夜やみよし野星に包まれて 同
 諍もなくて屯し万羽鶴 神戸 後藤比奈夫
 町中の人の温もり鶴ぞ知る 同
 露けくもさらに露けき思ひかな 同 和田華凜
 鈴虫の振る金の鈴銀の鈴 同
 いつ見ても富士はやさしき夏の山 相模原 木村享史
 娘の洗ひくれたる妻の墓を拭く 同
 山上は満天の星遠花火 長岡 安原 葉
 水引の花に触れつつ抜ける径 同
 朝かげのふいに一筋露の原 東京 河野美奇
 白萩や花より多き雨雫 同
 牛と目の合ふ颯風の風の中 北海道 安田豆作
 牧を駆く馬より迅し野分雲 同 熊本 岩岡中正
 ゆく夏の遠流めきたる舟ひとつ 同
 遠ざかるとき流燈となりにけり 同 福山 竹下陶子
 青春のこころに暖炉燃えてぬし 同
 九十二のの渾身迸る筆始 同

手花火のすめば眠たくなつてをり 龍ヶ崎 今橋真理子
 寺町の夕風はたと秋めける 同
 東京で買ひし花火を莊にきて 東京 大久保白村
 庭花火終り風呂場に子らの声 同
 一湾の凧ぎ秋天の駒ヶ岳 同 山田閨子
 星や月遠ざかりたる揚花火 同
 贈り主より先に着く花氷 宝塚 水田むつみ
 花氷薔薇は誇りを持ちつつけ 同
 日焼子の俊敏にして無口なり 吹田 大橋 暁
 百日紅紫がかかるこそ佳けれ 同
 朝顔の日々ありしこと終はりけり 熱海 嶋田一步
 朝顔の凋むが目立ちそめて終へ 同
 台風の落としてゆきし月ひとつ 東京 今井千鶴子
 人生にそんな夜もあり遠花火 同
 乱るるが盛りなりけり萩の風 奈良 古賀しづれ
 この句座を去りゆく人に萩名残 同
 生身魂生前葬もすまされて 神戸 三村純也
 七草を生ける順序のありにけり 同

心子選

鏡台 稲畑汀子

私が嫁いだ時に持ってきた鏡台は、二階の寝室の横の小部屋に、北窓を塞ぐようにどんと置かれてある。三面鏡になっていて、正面の鏡の前に、姑の愛用していた小引き出しの筆筒を置いて使っている。嫁入り道具であるこの鏡台には忘れられない思い出があり、鏡台の前に坐ると、そのことが頭に蘇ってくる。

結婚が決まって母が荷物を調べてくれた頃、私は風邪をひいて熱を出し、買い物に行かなくなり、母は妹の朋子を連れて買い物に行き、結婚の荷物の準備をしてくれた。

「素晴らしい鏡台があったのでそれに決めてきたのよ。母さんのへそくりで買うことにしたので、お父さんには見て頂かないように、直接、婚家に届くように手配してきました」

「へえ？そんな無理しかくてもいいのに」と言いながら嬉しかった。

我が家の俳句会が終って、京極杞陽さんがお泊まりになるのが恒例になっていた夕食のとき、ベルが鳴って大きな荷物が運び込

まれて来た。

「あら、困ったわ。直接、あちらに届けてほしいと頼んだのに」母は慌てている。

「何だ何だ」

父が出てきてその事情を知って、烈火のごとく怒りだした。

「大体、お前は贅沢だ！ 鏡台は返しなさい」

「そうは行きません」

と、母が言ったのに続けて、

「折角、お母さんが無理して買って下さったのに」

と言うと、父は手元の御飯茶碗を私に投げつけた。

「年尾さん、乱暴は駄目ですよ」

私を庇って前に立ちはだかったださった杞陽さんが御飯粒だらけになった。

結婚の荷物は無事に稲畑の家に届けられた。勤めを辞めて俳句一筋になった父の生活が大変だったことはよく知っていたが、母の気持ちも有難かった。

そのことを私は夫に話した。

「そうか、この鏡台は大事にせんとあかんぞ」

そう言ってくれたのももう昔のことになってしまった。

東の小窓から差す朝の日が、鏡台の前に坐った私の顔を浮き立たせるようにはつきりと照らししてくれる。

「うへえ！ こんなにしわしわなんだ」

結婚して六十年、夫が亡くなって三十五年、見事に私の皮膚の皺を映してくれる鏡は、さすがに上等なんだと感心する。若いころにバックをしていたケースも、もう空っぽになって久しいが、今はバックをする時間もないのだから仕方がない。

鏡台の前に坐ると懐かしい父と母、御飯粒だらけの杞陽さん思い出す。しわしわを見事に映し出してくれる上等の鏡台は私の分身でもある。そして、何時までも私の本当の姿を知らせてくれるに違いない。

